

はじめに

現在、アメリカでは新清史 New Qing History という新しい歴史研究の潮流が起こっている。一言でいうと、清朝を歴代中華王朝の脈絡の中でとらえるだけでなく、満洲族によって建国・統治された王朝であった点を重視し、清朝の持つ内陸アジア的側面の理解を深めることを目的とし、そのために漢語史料のみならず、満洲語を初めモンゴル語・チベット語・チャガタイ語等で記された史料を用いて研究を進めていこうとする動きである。一方、日本においても、大清帝国史の立場に立つのか、或いは東北アジア史・モンゴル史・チベット史・中央アジア史の立場に立つのか、研究者によって軸足の置き方に違いはあるが、同様の研究が盛んになりつつある。ただし日米の研究者は同じような研究の潮流があることには気付いていても、対話による相互理解が深められていないのが現状である。

また現在、中国では国家プロジェクトとして、『清史』

の編纂が試みられており、その過程で日本・アメリカを初めとする諸外国の研究業績を撰取し、研究視角を理解しようとする動きが見られる。

このような状況の中で、新清史研究の提唱者の一人であるマーク・エリオット氏、日本の新進気鋭の清朝史研究者である杉山清彦氏、及び日本で清朝史研究を行い、中国の研究動向を熟知しつつも、客体化してとらえている承志氏に、米・日・中の清朝史研究の潮流と現状を、研究史を踏まえて、ぶつけ合ってもらい、フロアからの質疑を交えて新たな清朝史研究に関する知の塊を参加者全員で作っていくことが、本シンポジウムの目的である。私自身は、企画が整った後、コーディネーター・司会を依頼されたが、このようなことを考えながらシンポジウムに臨んだ。

楠木賢道